

桜蔭俳話会 通信句会 (第百十回 平成二十五年度夏)

高得点句 自句自解

十一點

手を打ちて龍の声聴く寺涼し

辻 幸子

暑い暑い夏の日、京都相国寺で龍の天井画を見た時のことです。手をたたくとそれが法堂の中に響き、あたかも龍が鳴いているようです。涼しく感じられました。

十點

② 疎まるるを承知の意見青山椒

藤本 友子

近頃は、面倒なことを避け、相手に迎合する傾向にあるのが、我ながら情けなく思っています。裏庭で取れた青山椒を佃煮にしている折に、自戒の念を、俳句に仕立てました。

九點

① 魂の抜かれていたり昼寝覚む

小川名梅乃

今年の夏は例年になく酷暑だ。台風が進路を東寄りに変えて日本海に進む。勢力は弱まるも暖かい空気が流れ込む。この日は断続的に雨が降る。ソファに横たわっていたら、いつの間にか寝込んでしまった。午睡からふっと起きたら、外ではセミの鳴く声ぞする。ボーと考えるも魂が抜けたような心境になっていた。

日焼兒のどつと座を占むローカル線

小川名梅乃

じりじりと照りつける真夏日に、中学生のひとかたまりが、音を立ててきたローカル線に乗ってきた。様子からみると野球の帰りにみえた、その光景は健康的な青春を楽しんでいるようだ。炎昼はじつとしていても、汗が噴き出て、日焼けになる。性根据えたる暑さの中、自己の生き方を貫かれている様子が見えた。一心不乱になって運動する子供達までが見えてくる。

わだかまる心とけたりソーダ水

藤崎安紀子

行違いがあり不信感を抱いていた相手とゆつくり話し合いましたら、お互いに誤解していたことがわかりました。まるでソーダ水の泡がプチンとほじけたように心がすつき

りました。

八点

① 向日葵や見舞ふ赤子の太あくび

荒木ツル子

妹の家に元気な男の赤ちゃんが誕生しました。久々に巨面相する赤ちゃんの姿に飽きる事なし思いを重ねていました。おいとまする頃、拳を上げての太あくびに安心して帰って参りました。途中、一本の太い大きなひまわりの花が天に向かつて咲いて居ました。

七点

② 笹舟の箸置き涼し尼の寺

稲葉 幸

姉妹が尼僧とは、珍しいと思いますが、次の理由がありました。姉は幼年期に腸チフスに罹り、無毛となり、尼になる決意をしたそうです。四つ違いの妹は、男女の双子。世間では嫌ったそうで仏門に入ったとのことでした。姉は華道、妹は茶道の先生、小さな尼寺でした。訪ねた時のことを句にしました。

六点

③ いくばくの命の明かり梅雨の月

増田 守

脊髄小脳変性症は我が終生の伴走者。生きるための助力をするのではなく、徐々に運動能力を奪っていく。緩慢な死に向かう旅の同伴者である。でも、脳血管系や循環器系の疾患で急逝した友達の訃報を耳にすると、曲がりなりにも現に生きていることの幸運を思う。梅雨の月は、この命の消長を表すかのように雲間にふと現れた。